

太海フラワーセンター訪問記

龍ヶ崎市 小泉不二男

1月、江戸川橋にある永和印刷での日本ツバキ協会の理事会に出席した。3月に控えた野々市椿サミットの件などが議案にあがっていた。

隣席は山口勇理事。会議の合間の雑談のなかで、氏の主宰する鴨川椿盆栽会の椿展のことに話が及んだ。台木探しの苦労や持参した玉之浦の実生「浦玉」のことが話題となる。聞きつつ、以前行った太海の椿展会場が目に浮かぶ。

数日後、そのこともあってか氏からあらためて招待状が届いた。「お出かけください」の添え書きもあった。

今年は行きたいと思った。

しかし、いい機会だとする反面、少なからぬためらいが首をもたげる。

若い頃、館山に小原謹二氏を車で訪ねたことがある。氏が南房パラダイスで洋種椿の展示会を開いていたころだ。

道に迷いながらもようやく着くと、椿のビニールハウスから出てきた氏が「もう来ないものと話していたところだ」とお手伝いの女性と顔を見合わせて笑っている。午後4時であった。所要時間は2,3時間と甘く考えたが、実際は倍の6時間ちかくかかった。

ビニールハウスで、初めて見る豪華なトウツバキに目を見張った。ヌチオから航空便で届いた穂は夜を徹して50本くらい接ぎ木をする。静かな深夜は、接ぎ木に向いているなど、興味深く聞いた。椿を知って間もなくのころだった。

そうこうするうちに辺りは薄暗くなってくる。帰りは、九十九里の海沿いをやめて房総半島の山超えの近道をとった。地図を頼りに夜道を急ぐも、山道からいつしか野道に入り込み、家の明かり1つない山脈を迷いに迷った。

椿に無関心ながら遠路の運転を案じ同乗して来た妻も、いくら趣味とはいえあまりのことに無言の人となってしまった。結婚間もない30年も前のことになる。

茨城つばきの会ができて、今度は仲間と車2台で出かけた。このときは早めの出発を心掛けるとともに、馴れた人もいて海岸沿いの最短距離を直行した。しかし、それでも帰りは夜道を走ることになった。暗い中、コンビニでの休憩

を取り、重い疲労を抱えて運転したことを憶えている。雨も降り出し、またもや帰り道は長く遠かった。

これらのこともあって、2月の房総椿行には、椿盆栽を見たい思いと長距離運転の間で逡巡するのが常だった。

理事会の次の日曜、茨城つばきの会の総会が開かれた。早春椿の鑑賞会で出品会員の説明を聞きいたり、今年度の活動計画を審議したりした。

終わったところで山口氏の房総の椿展のを持ち出す。だれも行かなければ取りやめる心づもりで話したが、意外なことに同行希望の手が挙がった。高速道路も延伸しているという話も出る。高速を使い目安3時間、何より仲間もいることから、「久しぶりにみんなで行きましょう」となった。日にちは、山口氏の講演がある2月19日日曜日に決まる。

当日朝8時30分、集合場所の龍ヶ崎市役所に行く。すでに飯田庸夫、植竹亨、染谷彰の諸氏が来ていた。駐車場の河津桜がほころんで早春を感じさせる。

3人を乗せて阿見牛久インターから圏央道に入る。ほどなく待ち合わせの江戸崎パーキングに入ると、大関惇恕氏が運転する車に中山徹、小野村弘の各氏が笑顔で同乗している。総勢7名が揃って、挨拶を交わしたり行程を確認したりして2台の車で出発。

圏央道を成田方面に走ったことはないという人ばかりで、稲敷の田園地帯や利根川に目をやったりしているうちに、東関東自動車道に乗り換える。それまでの1車線と違い3車線の本格高速道路を真っ直ぐ南下。風が強い。竹林がおどろに乱れ、ときには車が横風に流されるが、日曜午前の空いた道を快調に走る。続いて宮野木で京葉道に入りそのまま館山道へ。君津インターでおりて有料道路を使う。房総山地を抜けると急にきらきら光る鴨川の海が目に入ってくる。予定ぴったり11時30分、所要時間3時間。快調なドライブだった。



太海フラワーセンター



椿展会場にて（後列右3人目山口氏）

日本ツバキ協会が太海フラワーセンター見学会を催したのは平成3年、まだ入会して日が浅く椿に開眼したてだったが参加した。東京からの特急で日帰り企画の案内だったが、茨城からなので余裕をもって鴨川のホテルに妻と前泊した。往復は特急で早春の房総を快適に走った。まだ新婚旅行気分が残っていた。

当日は早めにセンターを見学し、東京から参加者を入り口で待っていると、駅からの協会の一団が列をなして坂を下りてくる。先頭は協会の旗を手にした太田克典先生。笑顔で皆さんを引率されてくる。お迎えご苦労様といわんばかりに挨拶され、入会間もなく、知る人もいないなかで嬉しかったことが思い出される。

先生は、その後池袋の椿展に行った際にも、控え室に招いてくださったりといろいろと気にかけていただいた。同じ職業であったせいかこちらも当初から親近感を持った。高校を定年でご退職され、専門学校の校長としてこれからというときに病気で他界された。

太海フラワーセンターは、いうまでもなく花の名所。房総ゆえに早春の人气が高い。ここを会場にした椿展は安房椿盆栽研究会の主催になる。

研究会は、戦後、肥後流椿盆栽に瞠目したこの地の盆栽家たちが、身近に椿が多くかつ山地ゆえに盆栽のもとになる露出根が多く採取できることに気づいて始めたという。その後この地に定着し、安房流椿盆栽として知られる。ちなみに安房は、房総半島南部の旧国名。上総、下総を加えて千葉県とする。



展示室は、催事場を兼ねた建家に張り出された大きなサンルーム。お天気がよく、春の陽が天井から差し込む。明るく気持ちがいい。

居並ぶ椿盆栽はいずれも見事なものばかり。盆栽の素人ゆえ鑑賞眼はないが、それぞれの作品の曲の変化に驚く。房総の山野を探し歩いて見つけ出した逸品が目白押しに並ぶ。同行した飯田、大関、中山、小野村の各氏は盆栽愛好家。

さっそく一品一品じっくり鑑賞し互いに合評し、山口氏との意見交換を始める。



まほろば



不二（肥後）

到着早々にお昼の時間。会場のレジで食堂を尋ねると今日は予約で満員と云われ、がっかり。太海の町で探そうと会場を出たところで、若い女性が追いかけてきて、席を用意できましたとのうれしい知らせ。一同2階レストランへ移動。

予約席の片隅ながら席を得て、ぷりぷりのアサリ丼に卵をかけて舌鼓をうつ。人心地ついて周囲を眺めれば、早春の房総花巡りバスツアー客が続々と入って賑やか。こちらは、さっき見た盆栽や花をあれこれと椿談義が付きない。

1時から山口氏による講習会に参加。

椿展の会期は、2月19日から3月26日までと長いが、その間に2回講習会が開かれ、その第1回目にあたる。

会場には、すでに40人くらい集まっている。我々も混じる。

少し遅れて始まった氏の話は、椿盆栽作りに的が絞られ、冒頭から単刀直入に台木探しの要点から始まる。

曰く、露出根を探す、房総の山野は台木探しに向く、切り出した根は天地不問、上下は形をみて決めてよい、曲がりを見ていずれをおもてとするかの見極め、出来上がる盆栽を想像し接ぎ位置を決める、実物を使い目の前で切断して

解説し熱演される。聞いている方々もいずれも心得のあるようで、じっと聞き入り、鋸を使う手先に見入る。



2時間の講演で立ちあがる人なし
聴衆の熱意漂う会場



実物での実演および解説
内容もレベル高し



椿盆栽つくりを解説した冊子
早速当会員が入手



台木の乾燥防止にビニールで被膜
ビニールは農協販売品を推奨

流れるごとく話は続く。

切断した台木にビニールの被膜を巻き付ける。見事な手さばきで仕上がる。加工した台木が回ってくる。手元で皆さんが確かめていた。

多くの会員を数えたという安房椿盆栽研究会であったが、高齢化により現在は会員6名とのこと。会場の質の高い椿盆栽をみると山口さんを中心に伝統はしっかりと守られている。

話が一段落したところで、質疑。飯田さんが接ぎ木の時期、春か夏かを質す。当会の接ぎ木研究会は夏に実施。夏接ぎが多いようだ。対して山口氏は春を推奨。その後もいろいろと質問がでた。

あれよあれよと聞いていたものの、手元の時計は、すでに1時間半経過。質疑応答が続いているものの、帰りが案じられるので目くばせし合って退去。

会場で販売されていた台木の根を皆さん何本も購入する。おそらくこのために山口さんたちが山野を駆け回って掘り出してきたものだろう。いずれ茨城の椿展に見事な盆栽として飾られる日が楽しみだ。

お土産を買ったりして、センターを出たのが午後 3 時。来た道を逆にたどって、途中の酒々井で休憩し、龍ヶ崎に戻ったのは 6 時。

家に着いて、土産の干物を妻が焼いて、フラワーセンターでの昔の思い出や今日のことなど話ながら食べる。余裕のある房総行だった。それが何よりだった。

(平成 29 年 2 月)